

## 総合討論

植田:加藤さん、ありがとうございました。それでは総合討論に移りたいと思います。前半のご報告のなかでもさまざまな論点が出されていましたが、あるいはさらにあるかもしれません。すべて一度に話をすると収拾がつかなくなりますので、いったん加藤さんからの問題提起に沿って議論ができればと思います。お答えいただける方から、リプライをお願いできればと思います。

### 主体形成と対象認識

三浦:すごく重要な指摘をされたので、うまく答えられるかどうかわかりませんが、順番で私から。似田貝香門先生が、1986年に「コミュニティ・ワークのための社会調査」<sup>1</sup>という論文を出して、あの論文がすごく私は好きなんですが、そこで花崎皋平さんの話を出してきて、「主体形成と対象認識」という概念を出してくるんですね。つまり、研究者として新たになにか気があったり、新たに主体として形成されたりすると、そのことで研究者の対象認識が変わっていく。対象認識が変わると方法も変わるし、研究も変わるし、そこが相互に影響を及ぼしながら研究は発展していくんだということを言っていると私は解釈しています。

さきほどの話にもあったように、社会調査が制度化されてくると、つまり対象認識が制度化されていくってことになってきますよね。そうすると結局、同じような研究がどんどん再生産されていってしまっていて、縮小再生産されていくような気がするんですね。なので、「主体形成」と言うところとちょっとうまくいきませんが、どこかで、研究者としての気付きであったり発見であったり、なにか変わろうとか、なにかこの状況を変えようみたいな、状況を変えなくてもいいんですが、研究者としての主体としてのなにかが生まれるっていうことが、その研究者の方法にも研究にも影響を及ぼすのではないかと思います。そこは、似田貝先生からいろいろと教えていただくなかで気付きを得たこと、教えていただいたことで、重要なことだと思っています。

自分が調査した下北沢の運動も、正直、最初はちょっと冷ややかに見ていたんです。下北沢の近くの永福町に祖父母が住んでいましたので、子どもの時にかなり下北沢へ行っていて、すごく慣れ親しんだ街でもあって、ですから、大きな道路が通ると聞いたときには「えっ？」と思ったし、最初は Save the 下北沢とか、ちょっと派手な運動も見に行っただけです。けれども、かれらはなにかいろいろと言っているし僕も「道路は嫌だな」とは思うけれども、その線路の跡地は小田急の土地なんだから、どうこう言ってもしょうがないとその時は思っていたんです。

最初は中立的な立場で話を聞いていたんですが、ある時に運動をしている人に、「そもそも土地を持っている人がすべて決めていいんですか」と言われました。つまり、ちょっと難しい言葉で言いますと、私的所有権がどこまで支配的な権限を持っているのかということだと思えるんですけど、つまり「都市空間は誰のものなのか」というテーマにつながってくると思うんですけど、そのときに「ああ、そう言われるとそうだ」と、自分が当たり前で自明だと思っていたことがちょっと崩されたというか。そこは社会学の面白いポイントだと思うんですけど、それ

<sup>1</sup> 似田貝香門, 1986, 「コミュニティ・ワークのための社会調査」『公衆衛生』50(7): 441-445.

までは私的所有権を持っている人がすべて都市空間のあり方も決定できると単純に思っていたんですけど、それは「言われてみれば違うな」と思って、土地を持っていなくてもその都市空間を利用する人もいるし、それがその人の生活にとってすごく重要であったりするし、生命とまではいかないかもしれないけれども、その人の人生にとって本当に重要な空間であったりするものを、その土地を持っている人がすべて決めていいのかということ、それは必ずしもそうとは言いきれないなど、ある種の気付きというか、主体として形成されたわけです。そこから、「この都市空間は誰のものなんだろうか」という理論的な問題設定が生まれて、そこで、なにか聞くこととかも変わっていった気もするんですよね。おっしゃるとおり、それは確かにすごく覚悟が必要で、当時は行政の人たちとは、やはりちょっと関係性というところまでは、なかなかうまくいかなかった部分もあって。そういう意味では問題もあったんですけど、やはり自分としては、その問題意識がそこで新たに持てたということは大きかったし、そこで研究がより進んだという部分もあるのかなと思っています。ちょっと、あまりお答えになっているかどうかかわからないですけど。

### 立場の表明と調査戦略

植田:そこについては僕も少し伺いたいことがあって、立場を表明するというのは、調査戦略上も研究者の主体形成という意味でもすごく大きな決断で、その後に見えてくるものも聞ける話も違ってくると思うんですが、その「立場を表明してフィールドに入る」というのは、たとえば調査に行く前の日の準備のなかで、「明日は調査対象者にちゃんと立場を伝えて話を聞く」みたいなかたちで、その決断をしてからフィールドに行かれたということなのか、それとも、その場でやりとりをしていくなかで調査対象者に迫られるかたちで、表明せざるを得なくなって表明したところから始まったのか。なんというか、そこにはどのくらい偶発性があって、どのくらい調査者がコントロールできていたのか、そのあたりはどうだったんでしょうか。

三浦:そうですね。その分け方でいうと、前者だった気はしますね。自分のなかで、ある時、その運動主体との会話を経て意を決したというか、これはもう中途半端な感じで行っても得るものはないだろうと思って意を決して、スイッチが入ったという感じです。そういうところは狭い世界なので、すぐに話は広がるわけですよ。だから、「あいつは、ああいう立場だ」ということを、その後ほかの人もみんな知っているわけです。なので、いちいち毎回表明しなくても、という感じになっていったというのはあります。ただ、さきほども申し上げたんですけど、基本、みんな反対なんです。だから、そういう意味では、ほかの事例とちょっと違うのかもしれないですね。ほかの都市計画の事例とかだと、下北沢の事例ほどではなくて、もうちょっとはっきり分かれているのかもしれないですけど、ここは結構「実はみんな反対」というところが大きかったです。その意味では、結果的にはよかった部分もあるのかなと思います。

植田:すみません。司会があまりしゃべりすぎるのはよくないですね・・・

加藤:気になっていた点なので、もう少し伺うと、そこで下北沢から撤退するという選択肢もあったかもしれないわけですが、でも、それはなかったわけですよ、当然・・・

三浦:そうですね。何人かの先生からは、当時の下北沢の運動って成果が見えないし、「やめろ」

って言われたこともあります。「この運動は勝てないぞ」と言われて。だけど、その時に「それは絶対に嫌だな」と思いました。やっぱり、話を聞くということは、すごく責任があることだと思うんですよ。時間もっていただいたし、少なからず思いを託してお話ししていただいて、話したことをなにか活かしてほしい、下北沢にとっても活かしてほしいし同じように都市計画の問題で困っている人たちになにか役に立ててほしいという思いで、皆さん話されていたと思うので、たしかに研究では相当苦しんでいたんですけど、成果が出なさそうだとか苦しいからといって、それを捨てるのは嫌だなと思って。それで、あとは意地ですよ。意地だけでなんとかやっていますね。

加藤:そこでは、下北沢の調査をやめなくても、たとえば調査対象を広げるとか、いろいろな戦略があるなかで、やっぱり下北沢にこだわり続けたというところは、調査戦略の問題でもあれば、自分の意地も含めた問題意識もあると思うし、だから、そういった部分は、みんなもっと大事にしていいいし、みんなもっと語るべきとか語ってほしいなと思うんですよ。

三浦:だから、身体化されているんでしょうね、それこそ。

下北沢の運動主体は、ほかの同じような問題を抱えている地域と勉強会みたいなこともやっていたので、比較っていう手法もあり得たんだろうなと思うんです。けれども、比較っていうのは、またそれはそれで結構難しかったりするんですよ。社会的背景が全然違ったりとかするので。やれなくはなかったんですけど、比較をするという方向に行くよりは、深く掘り下げるという方向を、私はとったんですよ。その方向をとり得たというのは、この紛争の歴史がすごく長くて、50年前くらいからあったからでもあるわけです。今日はちょっと説明を省いてしまったんですけど、鉄道を地下化するか高架化するかで、実は50年前くらいからずっと論争があって、その運動の残っていた人たちが、また運動を続けていくんですけど、そういう歴史があるので掘りがいいがあったということです。いろいろと聞きたいこともあったし、その長い歴史の積み重ねが今に影響していたという部分もあったので、それで「この事例ひとつで書けるな」というのがなんとなくあって、比較っていう方向には行かなかったですね。だから、今後の展開としては、もしかしたらあり得るかもしれないなと思います。

## 駅西へのコミットメント

植田:ありがとうございます。では、次に林さんをお願いできればと思います。

林:はい。加藤さんが言われていた構造変動に抗うというのは、まさに僕のテーマで、構造と主体の問題ですよ。植田君や原田君とは「構造分析研究会」というのを昔やっていて、それをやっていた理由は、やはり自分の博士論文の「多摩ニュータウン開発」の研究<sup>2</sup>なんです。そこではライフヒストリー研究をやっていたけれど、高度成長期の多摩村の地主さんたちが開発に飲み込まれていくなかで、どう立ち上がっていくかということがテーマだったんです。ニュータウンというのは新住民ばかりだと見られがちだったけれど、そこにいる地付きの人たち、故郷がある人たち、旧中間層みたいな人たちの生きざまを描きたくて、その旧中間層と新中間

---

<sup>2</sup> 林浩一郎, 2012, 「多摩ニュータウン開発の構想と現実——都市計画と地域政治の社会学」首都大学東京人文科学研究科 2011 年度博士論文.

層の二重性にすごく興味があったということです。ただ、ライフヒストリーだし、開発から 50 年 60 年経った話を遡って聞いていたので、研究発表をしていたとき、市役所の人に「じゃあ、どうすればいいんですか」と言われました。そう言われたときに、「いや、困ったな」と思って、それが結構引っ掛かっていたんですよ。やはり、「過去のことだから」というふうに割り切れることではなくて、それは社会学の立場なのかもしれないけれども、どうすれば良い計画ができるのか、良い開発ができるのかということに、すごく引っ掛かりを感じていました。

あと、現在のことをやりたいという思いが、やっぱり、あったんですよ。現時点での開発のことを。当時、一橋大学の町村ゼミの人たちが東京の「都市再生」の研究をしているのを見ながら、それにも結構憧れがありました。2000 年代後半の頃のことですが、そういうときに都市再生特別措置法による開発を見ていると、やっぱり名古屋って、挙がっていたわけです。それから 10 年遅れくらいで、名古屋駅の再開発がラッシュを迎えていて、特に僕が名古屋市立大学に赴任するときというか、志願していたときに、中心市街地活性化基本計画による開発もしているし、都市再生緊急整備地域による開発もしていたし、ものすごい開発をしているという印象があった。しかも、それに反対する人がほとんどいない状況だったんですよ。熱狂しているというか、再開発とかリニアの開通を待ち望んでいるっていうところに、やっぱり興味を持ったんです。だから、なぜ名古屋なのかというと、開発というもの、開発主義的なものに飲み込まれていく旧中間層の人たち、商店街の人たちの、その生きざまを描きたいという思いがつながっている。しかも現時点でなにか自分も関わることができるというところに魅力を感じて、今、名古屋駅の駅西にコミットしているんだと思います。

だけれど、旧中間層とか商店街の古くからいる人たちは「開発待ち」です。「大規模開発待ち」なわけです。「リニアがここを通ったら、自分は率先して出ていくよ」という人も結構いたんですよ。でも、そういう流れのなかで、リノベーションをして若い人たちが入ってきているわけです。そういう人たちには、どちらかという開発に抗って、名古屋駅の東側とか東京みたいにはしたくなくて、駅西のサブカルチャーを残したいとか、駅西の風情を残したいという方が多くて、そこで新旧の二重性や二重構造みたいなものにもう一度巡り会った。駅西の大規模な再開発を志向する人たちと、リノベーションを志向する人たちがいる。でも、それが対立するわけではないので、そこでのミックス・ディベロップメントのようなものに、今、興味を持っています。

名古屋市役所がスポンサーということもあって、しかも、駅西には再開発やリニア駅開発に同意する人が多いなかで、自分が開発に飲み込まれていく街で反対運動を起こすというのにはあまり意味がないのかなと思っています。行政との関わりという点では、大きな力のなかに飲み込まれていった駅西という地域が、いかに自分なりの構想を持って立ち上がっていくのかということに、やっぱり興味があるのかなと思います。

やはり、学生をフィールドに連れていくということの危険性や問題点は、あると思うんですよ。特に、駅西は「危険な地域」というところもある。でも、学生を大勢連れていくと、やっぱり地域の人たちは顔色が変わる。それはそうなんですよ。むしろ、教員には興味がなくて、学生に入ってほしいみたいなのが、結構あるんですよ。特にリノベーション派の人たちに、そういうところはあります。学生たちが新しくまちづくり活動をするとなると、僕が研究調査していたときよりも協力的になってくれるし、そこはやはり学生の強さだなと思うし、優秀な学生も結構いるのでそういう反応になっているのかもしれないけど、学生が動くということは重要なんだなと思っています。調査実習は結構大変だし、毎年同じことを教育しなければいけないから、毎年ゼロからのスタートになったりするんだけど、学生が仲間にいるとい

うのは、とても魅力的だなとも思います。

加藤:なんというか、ある意味で火中の栗を拾うみたいな、すごくそういう印象を受けました。たぶん、いろいろと制約もありながら、でも、なにかそこに手応えを感じられているんだなという、その手応えみたいなものをすごく伺いたかったので、そういうことなんだと思いました。素朴ではあるけれども、それはすごく大事な話ですよ。特に、僕自身がまだ学生だからというのものもあるかもしれませんが。

### 仲間としての学生を連れて一緒にやりたかった

植田:林さんからは、折にふれて駅西調査の話をお聞きしているところがあるんですが、あらためて伺いたいことが2つあって、ひとつは、「じゃあ、どうすればいいんですか」というのが引っ掛かっていたというところから、自分も一員となってリノベーションをやるというところに行くには、やっぱり、かなり距離があるような気がするんです。それこそ、開発に翻弄されている人たちの世界観とか認識を描いていく、現在進行形のもを本当に現在進行形で記録して描いていくという戦略もあり得たと思うんですけど、そこであえて一線を越えて、現実を変えにいくところまで踏み込んで行くというのは、大きなジャンプがあるような気がしていて、それがどのように研究のなかで位置づけられているのかというのが、伺いたいことのひとつです。いろいろな経緯のなかで、順を追って、そうなっているのはお話を伺って納得するんですが、でも、初発の問いからすると、そこにはやはり断絶があるような印象があります。

もうひとつは学生をフィールドに連れていくというところで、社会調査実習をやっていると、学生がいることで調査の可能性が開けてく部分はもちろんあるけれども、自分で調査するよりも何倍も大変だし、アウトプットするところにかかる労力は2倍・3倍では済まないですよ。たしかにフィールドに入るときへの入りにくさの問題はあるかもしれないけど、林さんがひとりで入っていったほうが、よほどやりやすいのではないかという気もするんですが、林さんは、学生をただ調査のきっかけとして「使う」のではなくて、本当にいろいろと面倒を抱えながらも、学生さんを毎年毎年フィールドに連れて行かれるじゃないですか。得失と言うと少し違うかもしれませんが、そのあたりのことについてどう整理されているのかっていうのは、ずっと聞きたかったことです。

林:そうですね。ちょっとわからないけど、やっぱりそれは、社会学が調査をしていく、それこそ客体と主体を分離して調査していくっていうことに、ちょっとコンプレックスがあったんだと思うんですよ。やっぱり、清水義次さんとかに出会ったときに、自分で調査しているだけじゃなくて、地域に関わらないといけないということは、刷り込まれた。ちょっと、うまく自分のなかでも整理できていないですが、刷り込まれたとしか言いようがない。

三浦:お話を聞いていて、すごく面白いなと思って、私が勝手に解釈したんですけど、リノベーションとかを実際に一緒になってやらないと、その地域社会が本当に生き延びる術とか成果とか課題が見えてこないから、あえて一緒にやっていくことなのか。だから、いつまでもずっと同一主体であるとは限らないけれども、とりあえず、一時は一緒にやっているということなのかと勝手に思っていたんですけど。

林:確かにそうですね。駅西って、見捨てられているところがあるので、行政は入ってこないし、地域の主体もそれほど強くなかったなかで、自分が立ち上がらないと、動かないと、なにも起こらないんですよ。これはネオリベリズム的な主体形成のことにつながるのかもしれないけれども、どんどん競争が煽られるなかで、大学も競争しなければいけない、教員も差別化を図らなければいけないというなかで、どんどん煽られていって、そこで動いているという感じですかね。そういうとき、ひとりでは無理で、学生っていう仲間がいないと、僕には無理だった。

植田君とはちょくちょく会っていますけど、東京から出てきて名古屋で独りぼっちじゃないですか。やはり学生という仲間がいないと、発想も広がらなかったりするし、学生は理解してくれるパートナーになったりするんで、そこで学生と一緒にやっているというのはありますね、正直な話。そこでもやっぱり、難しい問題はあるし、ケンカもしたりするし、教員なのに馬鹿にされたりもしますし、つらいんですけど、それでもパートナーとして必要だった。だけど、もちろん独立して自分だけで調査をして、ライフヒストリーを書いて、駅西の変動や構造と主体の問題をえぐりたいという気持ちもどこかに絶対あるし、それをやりたいと思っている。それを描くためにも今これをやっている。このままだと、この地域は再開発に飲み込まれていくだけだし、リニアが通ると東京に飲み込まれると思うんですよ。「東京に飲み込まれないために自分もアクションを起こさなきゃ」っていう気持ちで、自分が動き出してしまったし、リノベーションしたいと思いましたし、仲間としての学生を連れて一緒にやりたかったということですかね。

三浦:すごく重要な点をおっしゃっていたなと思って。学生さんがある種のパートナーで、学生から馬鹿にされることもあって、それはすごく大変なことだと思うんですけど、でも、それはすごくいい学生さんじゃないかなと思うんですよ。植田さんの解題報告にもありましたが、社会調査士資格ができたことによって、結局、社会調査実習の授業が資格を得るための授業になるわけです。教えてもらうためのものになる。昔は生意気な学生が多かったわけですが、今は黙っていて、かなり受動的な学生が増えたなという印象です。だけど林さんのところはそうではなくて、学生が言ってくるし、パートナーになってくるというのは、調査を進めていくうえでも、研究者にとってもすごく力強いですし、調査がすごく有意義なものになってくると思います。

渦中に自分も入る、そしてそれを描く、そうしないと現場の人も理解してくれない

植田:林さんのところの学生さんの調査報告は僕も聞いたことがあって、林さんはすごく大変だろうなと思いつつも、でも、とてもうらやましいと思っています。

話を戻して申し訳ないのですが、多摩ニュータウンの研究はいったん置くとして、駅西の研究についても、「滅びの美を描く」という表現は不適切かもしれないけれども、たとえ街が開発に飲み込まれていったとしても、それも含めて街の姿をありのままに描くという選択肢もあるわけじゃないですか。そういう選択もあり得るのに、それでも、やはり開発に抗う地域を描こうというところで、しかも、抗う動きが地域にあまりないならそれを起こすために地域に介入しようというのは、林さんの研究のなかでどう位置付けられているのかということですが・・・

林:2年目までは、「滅びの美」みたいなものをモノグラフとして描こうとはしていました。こ

のまま商店街が飲み込まれていくんだろうなど。それで東側みたいになっていくのだろうなど。そういうさまを描きたいと思っていました。だけど、やっぱり3年目くらいから、新しい担い手である若い人たち、「リノベ世代」なのかもしれませんが、かれらが下から盛り上げるというのを見たからかな。僕は「下からの都市再生」って言っているんですけど、「都市再生」って、国や民間資本が上からバーッと開発していくところに違和感を、僕は感じているわけです。そこに現にリノベーションでお店をやっている人たちが出てきて、これは「下からも都市再生を起こさなきゃいけないんじゃないか」と思って、それに一緒にやりたいと思ったということかな。結局、それでも滅ぼされるのかもしれないけど、その渦中に自分も入る、そしてそれを描くっていうことは、重要なことなんじゃないかなと思うし、そうしないと現場の人も理解してくれないし、話してはくれないだろうから。それで今、たしかに学生がまちづくりをやり始めたりして、急速にネットワークも広がってきているから、そこは自分でやらなければいけなかったのかなとは思いますがね。

加藤:そこまでして、だからこそ描けるものというのは、なんでしょうかね・・・

林:自分は、開発や大きな構造に巻き込まれる、構造にとり込まれる、主体化されていくってことを描きたいのかもしれないですね。だから加藤さんが言われたように、「構造変動にさらされながらも、いかにして自らの手で社会を形成するか」を、実体験したいんじゃないんですかね。

加藤:まさに同時代史というか・・・でも、おそらく調査ってそういうものかなと思いました。僕もそんなに経験はないけど、なにか自分で見たいみたいなの、結構そういう欲望で調査をしているところは自分自身にもあって、なんとなくわかるような気もします。でも、そういう気持ちは続くんですかね。つまり、これだけの磁場があると、どうしても途中で気持ちが折れるというか、自分だけではどうしてもコントロールできないこともあると思うんですが、そこで気持ちを続けていく工夫というか、そういった調査のアレンジメントには相当神経を使うと思うんですけど、そのあたりは実際どうでしょうか。

林:いや、折れそうです。折れそうですよね。大学も、「まちづくりをしろ」、「地域に貢献しろ」と煽るのに、リスクがあるとストップをかけたりするじゃないですか。でも、学生は動き出す。その大学と学生の間で板挟みになるので、すごくつらいですし、今ちょっと心が折れそうではある真っ最中ですね。でも、ここからもう一度、大学とまちづくり団体と自分がどういう関係性を結んでいくか、また地域の人たちにどう説明して、どう街を変えていくかということは考えたいとは思いますが、しなければいけないと思います。

加藤:現在の調査者は、現場でそこも含めて求められてしまっているということですね。似田貝さんのときは、そこまではなかったのかもしれませんが。三浦さんもおっしゃっていましたが、その頃は権力と運動みたいな図式ですごくソリッドというか。でも今は、権力の働き方もそうだし、調査主体もソリッドではないということが、苦しいですけど、すごくよくわかる事例ですね。

## 支援のついでに調査をするというスタンスでないとできない

植田:そろそろ、原田さんに行きましょう。お待たせしてすみません。

原田:加藤さんからいただいた質問は、研究者はどこまで引き受けるべきなのかということと、支援と調査の緊張、あとNPO法人の立ち上げの話と、調査者-被調査関係あたりのことだったかと思いますが、ちょっと順番にお話をさせていただきます。

まず、どこまで研究者が引き受けるべきかという問いは、僕の今回の調査ではその問い自体があまり成り立たないんですね。というのも、僕のなかでは、支援者として引き受けているので、その質問には「いや、支援者だから引き受けています」としか言えない感じなんですね。さきほど加藤さんは、「研究者はどうしても支援者に勝てない」でしたっけ、そういう表現をしていたと思いますが・・・

加藤:「勝てない」というか、「なりきるのは難しいな」みたいな・・・

原田:それについては、僕は、今回は完全に支援者になりきっている感じなんですね。おそらく、僕が今関わっている現場での周りの人たちとの相対的な関係のなかで、そういう自分を作っているんだと思うんです。現場に関わるスタンスとしては、たまたま社会学の研究者だけれども、自分のなかでは支援のほうが上回っているようなかたちです。さきほどの「支援者に勝てない」みたいな話だと、「福玉便り」って他県の支援団体の方々にも認知していただいている、この現場では『福玉便り』の原田のほうが自己紹介しやすいんですね。なので自分では、研究者としてどこまで引き受けるべきかということ突き抜けてしまっていて、支援者だからやっているという感じで、それを研究として記録している。それを社会学としてどのように話ができるのかというのは、今日お話ししたようなことでした。

ただ、それが必ずしも僕の絶対的なアイデンティティというわけではなくて、僕の博士論文<sup>3</sup>は「NPO法のロビイング」をテーマに書きましたが、そちらは本当に研究者として関わっています。自分は運動には関わらずに、運動を追いかけながら記録で残して、運動の記録を同時代史として書いていたりしています。あるいは逆に、立教大学コミュニティ福祉学部には復興支援室という活動があって、そこでは学生をいわき市とかに連れて行ってボランティア活動をするんですが、僕はそこでの活動は一切論文化してないんですね。それは完全にボランティアと割り切っています。ですから、僕は、その場その場に依拠して自分の立場を作っています。でも、今回の埼玉の避難者支援の場合は、現場のアクターになりきっている感じがあって、研究者として引き受けるというよりは、支援者として引き受けて、やるべきことをやっているという感じです。ただ、当然、自分ではできないこととか燃え尽きることが何度もあって、精神的にきつかった時期があります。支援者の燃え尽きってという、いろいろな現場で言われているようなことを自分も経験したんですけど、それは研究者としてではなく支援者として何度かバーンアウト的なことがあったりしました。

そのうえで、支援と調査の緊張関係という話なんですけど、原発避難という非常にセンシティブなテーマでは調査を前面に出してはできないから、支援のついでに調査をするというスタ

<sup>3</sup> 原田峻，2017，「NPO法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動——ロビイング戦略・組織間連携・帰結の分析」東京大学大学院人文社会系研究科2016年度博士論文。



ンスでないとできないというのがあって、現場のなかでそういう自分の立ち位置みたいなものが作られていったということがあります。当初はいろいろな葛藤や経験がありましたが、その立場が決まってからは、調査と支援とで、自分のなかではあまり緊張関係はなくて、書いている論文とかも、まず現場の人に読んでもらおうみたいなところが強くなっているかと思います。

あと、NPO 法人の立ち上げも属人的な話で、いろいろな事情から、「じゃあ、もう自分たちが中心になって法人を立ち上げたほうがいいよね」という話になって、NPO 法人を立ち上げました。別の人が理事になってくれたらよかったです、ほかのみんなも忙しかったので、「じゃあ、申請書類を書こう」という気になったのが、西城戸誠先生と僕だったので、ほかの人も巻き込んで立ち上げたような感じです。そこは、なにかロジックがあって研究者が NPO 法人を立ち上げたというよりは、かなり現場のなかでの人間関係的なところから立ち上げたというのにはありました。ただ、いろいろな組織が自分たちの本業があるなかで片手間にやっているだけでは対応できない状況になっていて、こういった専門の団体を立ち上げたというのは、それこそ似田貝先生が調査しているように、おそらく神戸とかで震災のあとに様々な団体が立ち上がったのと同じ流れをたどっているのではないかと、後々になって思ったりしています。

### 調査者-被調査者関係は、なにを明らかにしたのかとセット

原田：あと、調査者-被調査者関係の問題を暗黙知的にクリアしているのではないかと、過大のお褒めをいただいたんですけど、ただ、僕のなかでは、その問題をちょっとずらしています。本当に時間ぎりぎりになって一番言いたかったことを言うんですけども、今日出てきたような「似田貝-中野論争」というのは、もちろん方法論として大事なんだけど、やはり、その調査はなにを明らかにしたのかということとセットですよ。端的に言うと、その頃の「似田貝-中野論争」は、三浦さんに整理していただいたとおりでですけど、1970 年代の似田貝先生の場合は『住民運動の論理』<sup>4</sup>と不可分ですし、中野卓先生の場合は『口述の生活史』<sup>5</sup>があるし、その後の似田貝先生の「共同行為」論には『自立支援の実践知』<sup>6</sup>があるなかで、似田貝先生の「共同行為」論が方法論的にだけ議論されてしまうのは、すごくもったいないという気がしています。

『住民運動の論理』が明らかにしていることというのはミクロな論理だけではないし、僕が一番面白いと思うのは、組織連関図と展開過程図なんです。僕は修士のときから、ずっとそれをやりたいと思っていて、それをいまだにやっているようなところがあったりします。「似田貝-中野論争」の頃にやられていた住民運動の調査というのは、やはりメゾレベルの組織間の関係性とマクロレベルの展開過程を押さえるもので、そこと切り離して「似田貝-中野論争」を評価していいのかということが僕のなかであったりします。いろいろと議論しているけど、実際に組織関係とかをあれだけ明らかにできているので、それを当事者との関係性のなかであれだけできているのであれば、それでいいのではないかというか。要は、調査者-被調査者関係という、時にミクロな個対個の調査者と被調査者の関係性で、そのなかでの論理という話になってしまうけれど、実際に社会学者が明らかにするのは、ミクロな個人の意味世界だけではなくて、さ

<sup>4</sup> 松原治郎・似田貝香門編著、1976、『住民運動の論理——運動の展開過程・課題と展望』学陽書房。

<sup>5</sup> 中野卓編著、1977、『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房。

<sup>6</sup> 似田貝香門編、2008、『自立支援の実践知——阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂。

さまざまなメゾレベルでの組織関係とかマクロレベルの社会構造であって、ミクロから一点突破ですべて明らかにできているわけでは決してないし、似田貝先生たちが福山調査<sup>7</sup>とか神戸調査<sup>8</sup>でやった行財政過程分析などは、まさにマクロのほうから調査をしていて、そういうこともやっていたはずなのに、似田貝調査論からはその話はすっぱり抜けている気がします。

社会学の調査って、メゾレベルでもマクロレベルでもたくさん大事なことをやっていて、ミクロな調査者-被調査者関係を過度に問題視しないでも方法論をクリアできるというか、メゾレベルの調査であれば緊張関係が発生しないこともあるんじゃないかと思うんですね。僕がやっている調査でいうと、おそらく避難者の聴きとりだけで調査をしてたら、こんなことはできなかったと思うんですけど、自分が支援団体のひとつのアクターになって、メゾレベルでの支援団体間の関係とか、大きな意味での支援の構造みたいなものを明らかにするうえで、調査者-被調査者関係はひとつの問題であるけれども、ひとつの問題にすぎないというか。それを回避して問題を「クリア」できているように見えたんじゃないかなと思います。すみません、伝わっていますかね・・・

加藤:いや、でも、わかる気がします。「共同行為」論を調査の目的と切り離して論じてしまったり、あるいは、どうしても「共同行為」論を調査におけるミクロな社会関係の問題と捉えてしまいがちなのもわかります。

ただ、逆に言うと、「ひとつの問題に過ぎない」ことをあえて大々的に言ってしまうのが似田貝さんという研究者の個性なんだということで、そういう受けとり方もしました。最後の話は、そういう話なのかなと思いました。

でも、おそらく、「支援の人」になりきっていると自分で言う人はなかなかいないですよ。そこは、僕にはすごく特異な人に見えて、それはどういうところから来ているんだろうということが知りたかったので、細かくいろいろな話を聞いているという感じです。そうですね、なんとなく伝わってきてはいます。もうちょっと掘り下げたい部分はあるんですけど・・・

植田:「似田貝-中野論争」ですが、原田さんが最後におっしゃった「共同行為」論の部分は少し議論になるところかなと思ったんですが、三浦さん、いかがでしょうか。

三浦:そうですね。おっしゃっているところでわかる部分もあります。完全に理解できていないかもしれないですけど。似田貝先生は、昔は構造分析をされていたけれど、途中でミクロな方向に行ったなというのはあるんですよ。でもご本人も、どこかで構造分析とつなげたいと今でもたぶん思っていると思うんです。ただ、どうしてミクロな方向に行ったのかという、従来の構造の認識では難しいというのもあったのと思うんですよ。そこですごく四苦八苦しているけれども、ただ、ミクロなレベルだけで議論しているのではないと思うんです。今日も少しお話ししたんですけど、人々の経験の思想化みたいな過程は、ほかにも適用できるだろうし、ある種のメゾレベルであろうというところで考えているのではないかと思うのですが、それが難しすぎてあまり伝わっていないと思います。報告のなかでお見せした『自立支援

---

<sup>7</sup> 蓮見音彦編, 1983, 『地方自治体と市民生活』東京大学出版会; 似田貝香門・蓮見音彦編, 1993, 『都市政策と市民生活——福山市を対象に』東京大学出版会。

<sup>8</sup> 蓮見音彦・似田貝香門・矢澤澄子編, 1990, 『都市政策と地域形成——神戸市を対象に』東京大学出版会。

の『実践知』の図（本報告書 21 頁に掲載）ですが、あれは被災地に起こり得る人々の動きであり、認識の展開だと思うんですけど、それが、原田さんがおっしゃったような支援団体の連関図とどのように関係するのかなとか、そこをつなげられれば面白いと思います。今日はちょっと端折ったんですが、言い方は難しいですけど、似田貝先生は、自分が共感できる主体と共同行為をしていくわけですね。だから、ひとつの団体の連関図とかだったら、やろうと思えばやれるはずだと思いますね。

原田：たとえば、阪神淡路大震災の調査では、特定の団体の方が分析対象になっていますよね。でも、神戸にあるのはその団体だけではないし、他にも活動していた団体は数多くある。そのなかで、組織構造みたいなものよりも、数人のアクターの論理で突破しようとしていて、すごく大事なアクターではあるし、そこから見えてくる世界ってあるんだけど、それは被災地のメゾレベルやマクロレベルの社会構造から、少しずれてしまうんじゃないかなという違和感なんですよ。なので、僕は東日本大震災後にこの現場に入るようになってから、『自立支援の実践知』よりも、かえって『住民運動の論理』のほうを再評価するようになっていったんです。どのスケールで対象を設定するかにもよると思うんですけど、僕の場合は、なんとなく埼玉県全体に関わるようになったので、そのスケールで物事を見るときには、やっぱり『住民運動の論理』の組織連関図などはいろいろと使えるけれども、『自立支援の実践知』の「共同行為」の論理は合わないと思うようになったんです。そこは見ている事例とスケールのとり方の違いなんだと思うんですけど。

三浦：これは研究者にとって、すごく価値選択なんですよ。特に、被災地支援の現場とかでは、すごくいろいろな立ち位置があり得ると思うんですよ。今日のテーマにもつながってくると思うんですけど、だから、そう言われる覚悟をしていると思うんですね。でも、似田貝先生の想定する社会構想においてはすごく大事だということと、その経験の思想化をたどっていくということなんだと思います。だから、その意味では、現状として、構造を描けていないというのはそうなのかもしれないですが、それをどう構造につなげていくのかというのは重要だと思いますし、我々研究者の課題でもあるのかなと思います。

植田：すみません。そろそろ時間が限界に近づいてきてしまいました。

先ほどから既に議論になっていますが、最近、質的調査が注目されていて、いろいろと特集も組まれたりしていますけど、そこでも基本的には、調査対象の単位として想定されているのは個人であるように思います。だけど、団体とか組織とか、自治体のような機関とか、もう少しメゾからマクロにかけてのレベルで調査対象の単位を設定する質的調査というものもおそらくあり得て、地域社会学や都市社会学は、そういった調査をずっとやってきたはずなのに、その部分の議論があまりないように感じていたんですね。冒頭の解題報告には組み込めていないんですけど、今回のワークショップを企画した背景には、こうした問題関心も実はなんとなくあって、それで地域社会学や都市社会学を専門とする今日のメンバー構成になったという部分があります。社会学のなかでも、もう少し領域を広げたときに、今日のワークショップのような問題設定がどこまで通じるのかというのは、課題として残るところかなと思っています。

本日はご報告いただいた内容は、調査テーマもフィールドもそれぞれですけど、「もしなければ調査できないのであれば、どんなことを引き換えにしても、それをやる」という調査姿勢という点では、共通するところが大きかったように感じます。うまく言えませんが、都市

研究のシカゴ学派が、使える調査手法を「なりふり構わず」何でも用いた食欲さのような、そんな精神を感じました。逆に、社会学の調査ならではの専門性はなにかとか、大学の研究室や研究者でなければできない調査とはなにかとか、このワークショップのテーマ設定や解題報告の問題提起は、ある意味で、大学とか学問みたいなものを背負い過ぎた、「自意識過剰」なものだったのかもしれませんが。ただ、こうしたことのいちいちについて、言葉にできるように備えておかなければならないような、そういった状況に研究者が置かれているということも、あらためて感じたところです。あまりまとまりはありませんが、こうした感想でもって、閉会のご挨拶に代えさせていただければと思います。

議論すべきことは、まだまだ尽きませんが、既に大幅に時間を超過してしまして、続きは懇親会でということにさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。